

7月例会

7月27日（日）

夜7時〜8時半

プログラム

お勤め・法話

話し合い

仙教讚歌練習

※これまで練習した

歌のおさらい

放談会（気楽に雑談しましょう）

◎話し合いテーマ

「正信偈を味わう⑨」

昼ならば――日の明るさの中にある

「一昼のしあわせ」を楽しむ。

「夜の二時を過ぎた。――」

か・く・あ・れ・ば

昼はひねもす。夜はよもすがら。

どれもよし。いつもよし。寺川幽響先生

仏教用語の解説⑨

《微子》

一般用語：びみょう
仏教用語：みょう

「微妙」は、一般用語では「びみょう」と読み、「それは非常に微妙ですね」などと、簡単には言い表せないさまを示す時などに使います。

ところ、仏教用語では「みま
よう」と読み、「計り知れないほ
ど深くて見事で、不思議なさま
という意味に使い、仏教のみ教え
や、それを悟る智慧が、奥深く、
すぐれたさまを形容する言葉とし
て、お経の中では、しばしば出て
きます。

例えば、月参りでお勤めさせて頂くことから皆さんにもなじみの深い「阿弥陀経」の中にも、

池中蓮華

大如車輪

赤色赤光

白色白光

微妙香潔

とあります。

この箇所は、阿弥陀様の極樂淨土のうるわしいすがたを示すとこ
ろで、「極樂淨土にある池の中に
は、車輪のように大きな蓮の花が
あつて、青い花は青い光を、黄色
い花は黄色い光を、赤い花は赤い

光を、白い花は白い光を放ち、
いずれも美しく、その香りは氣
高く清らかである」という意味
で、「おもしろくない」みたいな
「みんなが違って、みんない
い」の詩を思い出します。
計り知れないほど、見事に美し
く、香り清らかに咲いているさ
まを示す言葉として、「微妙」
という言葉が使われています。
実は、この「微妙」という言
葉が、「みみよう」と読み、こ
のようない意味に使われるのは、
けっして仏教用語としてだけで
なく、今昔物語集などの古文で
も同じように使われています。
したがって、「微妙」という
言葉のもとでの使われ方が、
いつのまにか現代のような使わ
れ方に変わってきたようです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「仏さまの教えは微妙（み
みよう）」なのですが、けっし
て「仏さまの教えは微妙（び
みよう）」などと読まないでく
ださいね。

全然意味が違ってくるよ
ね。



題材法話

○源信和尚（げんしん
かしよう）のお話

お釈迦様の教え仏教は、インドから中国を経て日本に伝えられたのですが、その中でお念仏のみ教えを間違ひなく伝えてくださった大切な方々七人を、親鸞聖人は七高僧と呼んで敬われています。

その中の一人に日本の源信和尚がおります。

この源信和尚は往生要集という有名な書物を著されたことでも、一般的に知られています。

源信和尚は、幼い頃から大変に知恵が優れた方で、非凡な方であつたと伝えられています。

○幼い頃の源信和尚

その源信和尚の幼い頃の話に、こんな話が残っています。

源信和尚の幼名は千菊丸といい、七歳でお父様を亡くし、お母さんと



二人暮らしでした。千菊丸が九歳の頃のある日、小川で遊んでいると、ある比叡山の偉い修行僧が川でご飯を食べた後の食器を洗っていました。そこで千菊丸は「お坊さん、ここで洗うより、もつと上の方で洗った方が水がきれいですよ」と教えてあげたのです。ところが、その修行僧は「坊や、水がきれいだから汚いだとかは、人間の心が判断するもので、そのようになことにこだわらない心を持つように私は修行しているんだよ」と応えられました。そうしたら、千菊丸はすかさずに、「それなら器を洗うこと自体が、既に心が囚われているんじゃないのですか」と、切り返したのです。

この答えを聞いた修行僧は、はっと気が付いて、この少年はただならなれないと思ひ、早速に母親のものと行き、「この子は、必ず立派な僧になる。是非比叡山で勉強させ



たい」と母親を説得し、比叡山へ連れて帰りました。

○お母さまの願い

比叡山での源信和尚は、やはり予想通り優れた才能を発揮して、またたくまに若くして高僧と呼ばれるようになった。わずか15歳で、当時の村上天皇の前で特別に「称讃浄土教」というお経の講義をすることになりました。これは大変な栄誉です。

村上天皇も講義の内容に大層感心をされ、すぐに、「僧都」という高い位の称号を与え、沢山の褒美の品を贈られました。

そこで源信和尚は、早速田舎で一人暮らしをしている母親に喜んでもらおうと思いい、褒美の品を母親に送られたのです。

ところが母親からはすぐにその品が送り返され、このような和歌が添えられてきました。

後の世を 渡す橋とぞ
思ひしに
世渡る僧となるぞ
悲しき



「あなたは、人々を仏の世界に導くために僧侶になつたのではないのですか？ 金品や名譽を喜ぶ僧侶になつてゐることに、母は悲しいです」

世間の地位や名譽に囚われることのない、眞實の道を求めてください。それが本当の求める道であり、母の本當の願ひなのです、と戒められたのです。

そこで源信和尚は、すぐに思い直し、いよいよ仏道に励まれ、後には天台の座主にまでなられました。

けれどご自身は、聖道門の頂点に立ちながらも、阿彌陀如来の他力本願の救いを願われ、日本の浄土教のもとを築かれたのです。

子に願ひをかける親としても、親から願われてゐる子としても、この源信和尚のお母さんの言葉には、眞摯に耳をかたむけたいものです。

そして、私達の本當の幸せを願ひ、その道を示してくださつてゐるのが、私達の共通の親、阿彌陀さまなのです。

住職法話より